

雑誌『支那学』が紡いだ 近代日中学術交流

— 青木正児と胡適との往復書簡を中心に¹⁾ —

辜 承 堯

はじめに

大正九年（一九二〇）九月一日、京都帝国大学の「支那学出身在洛浪人」である小島祐馬、青木正児、本田成之が在野の立場で学術同人雑誌『支那学』を創刊した。青木によって執筆された「発刊の辞」では、「応神以還、常に我を導くものは漢学、突如として之を覆すものは西学、学も亦浮沈あるか。人の支那学を顧みざる、当世より甚しきは莫し²⁾」と、「漢学」、「西学」、「支那学」の三つをキーワードにそれまでの日本の学術趨勢が捉えられていた。「西学」によって覆された「漢学」を批判した上で、「支那学」を登場させたのである。

雑誌『支那学』の登場より少し先に現れた京都支那学派は、ヨーロッパシノロジー支那学の民俗学的方法と清朝の考証学を取り入れ、中国古典をめぐる当時の日中両国の「漢学」に対してその実践性の乏しさを批判する立場から論文を多数世に出していた。この二十八年間も刊行された雑誌には、フランスの漢学家アンリ・マスペロの「Les Commencements de la Civilisation Chinoise」（中華文明の誕生）や、郭沫若の「謚法之起源」のような国際的で優れた視野の論考を集結させていたのである。これゆえ、京都大学文学部の三十年史では、「支那学研究のよき参考として海外同学者の間まで認知せられるに至ったのである³⁾」と高い評価が与えられている。

本稿は、その『支那学』の影響力の強さを明らかにするために、青木正兄と胡適、魯迅、周作人、呉虞との往復書簡を取り上げ、『支那学』を媒介に繰り広げられた交流のネットワークを考察するものである。

一、「貴方がたの出現が如何に私を喜ばせたでせう」

——知己として胡適への本音

青木への胡適の第一信に「承先生寄贈支那学第一卷第一号」⁴⁾（書き上げたのは一九二〇年九月二五日、以下同様）と示されているように、青木は同月一日に発刊されたばかりの『支那学』創刊号を直ちに胡適を進呈していたことが分かる。その理由は胡適宛の第一信に吐露されている。

胡先生！私は貴方がたの勇ましい革命運動をぞくぞくする程嬉しく思っていました。私は一人で黙つて貴方がたの雑誌を此の京都の市中から一里ほど^{へだた}巨つた田舎で前山と対し乍ら読み耽つてはくそ笑んでいました。私には此の喜びを^{わか}領つ可き友が無かつたのです。（中略）私共二三の同志は彼らの迷夢を醒す可く『支那学』を発刊致しました。そして私は真先に貴方がたの勇しい企を彼等の目の前に展観することは実に痛快に感じているのです。つまり私は貴方がたの威力を借つて私の小さい憤慨を漏したに過ぎません。（中略）胡先生！私が十二年前支那文学を自分の行く可き道だと決定して学窓に憑ると間もなく、私は戯曲小説に親み始めて白話文学の興味を覚えたのです。そしてお国の文壇に白話文学の機運が盛んになるのを待つていたのです。林琴南先生の翻訳なんかでは満足出来なかつたのです。戯曲研究家として王静庵先生に望を嘱していましたが、矢張駄目でした。先生が此地に在住せられた時逢つて見ると、頭の古い人でした。（学究として尊敬し可きですが）貴方がたの出現が如何に私を喜ばせたでせう！（一九二〇年十月一日）

一九一一年七月に京大を卒業した青木は正式な職につかず、「よく写生に出かけ、画かきになろうか」と思うほどの「在洛浪人」であった。「何の為に日本人たる私が支那の事を研究せねばならぬのか（中略）西洋文化が押寄せた時世に此様な物をいちつて居て何になるであらう」⁵⁾と、西洋文化の嵐吹き荒ぶ明治末期に、この青年は進むべき方向を見失い、鬱憤を晴らす術すらなかったようである。進路に深刻に苦悩したあげく、「虫は喰つても、黴は生へても『離騷』は『離騷』だ。真の文芸や大思想に古い新しいは無い筈だ」⁶⁾（一九一五年七月）とようやく支那文学への道を固めるに至っている。その後、青木は同時代中国の学術の動向に関心を向け、特に古書店・彙文堂を通じて雑誌『新青年』や『新潮』などを講読し、それにより次第に近代的中国文学の行く末に思いを馳せるようになっていた。こうして、古典文学を如何に新時代に生かすべきかに苦闘していた青木は、『新青年』に掲載されている胡適の「文学改良芻議」（一九一七年一月）による、旧来の文語を捨てて白話を積極的に使用すべきという主張と、そのアメリカ帰りの斬新な方法論に鼓舞され、ヤングチャイナの文学に灯火を見出したかの如く、『支那学』の創刊号を直接胡適に進呈したのである。「貴方がたの出現が如何に私を喜ばせたでせう」の一文からは、胸中を語り合える知己を見つけた青木の高鳴りがひしひしと伝わってくるようである。

雑誌『支那学』が創刊された背景には、「貴方がたの威力を借つて私の小さい憤慨を漏した」ということが見逃せないであろう。その「憤慨」には前に触れた西洋文化の殺到による東洋文化の衰退もあれば、東大漢学に代表された経学を中心に行われた主観性や護教性の濃厚な儒学研究への不満もあったと思われる。

青木はこの『支那学』が創刊された一年前にも、胡適たちにより提唱された白話文学の主張に注目し始め、その近未来を次のように楽観的に予言している。

文体に就ても口語文が漸く盛ならんとする兆がある。(中略) 今年創刊の『北京大学月刊』など新しさ加減と云つたら漢文を横行に書き、句読其他の符号もすっかり欧文のものを使用し三分の一位は口語文を以て記されている。また『新潮』と云ふ新しい雑誌も今年北京大学から発刊され、新文明を謳歌している。(中略) 今は新空氣の吸収時代である、新學の準備時代である。されば遠からず光彩ある文學を吾人の前に展觀する日の來ることは期して待つ可きであらう⁷⁾。(一九一九年十二月)

さらに、彙文堂により發行された中国からの輸入書籍の宣伝を兼ねた書評雑誌『冊府』に、胡適の新著『中国哲学史大綱』（一九一九年、上海、商務印書館）を戯画調まじりで紹介し、「此人にして此著あるを瓢公（青木の自称——著者注）が最も喜ぶ所以は、第一西學に浸潤した新婦朝したハイカラ先生が新しい頭で自國の古典を研究した点」と高く評価している一方で、再び急先鋒として胡適の白話の主張を取り上げている。

胡適君が洋行歸りのちゃきちゃきとして北京へ乗込んで、『新青年』誌上に文學的革命を絶叫したのをきつかけに、新し好きな若い者共がわいしよわいしよと推かけた、正に是れ談笑して之を麾けば天下靡然として公に従ふと云つた塩梅式。陣頭に立つた胡先生の雄姿と云へば、米國のボストンとやら何處とやらで磨き上げた腕に糾をかけて、小説論文は無論、口語體、無韻無平仄の散文的口語詩の新らしさ加減には國粹先生方が驚いて目を廻したさうな。それが又若い連中には大もてで流行るなんの段ぢや無い、『新青年』とそれに續いて『新潮』と云ふ北京大学の若い衆が打つて出た雑誌などでしきりにやつている⁸⁾。(一九二〇年五月)

このような背景から、青木は『支那学』の創刊号に、白話運動に焦点を当てた「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」を発表したのである。この論文では前述のような胡適への絶賛だけにとどまらず、その主張の欠陥を指摘したことが注目に値する。

その著しい遺漏は文学の外形的改造に意を注ぎ過ぎて、内容を省察することに手落がある。内容に関して胡君の挙ぐる所は単に「不作無病是呻吟」「須言之有物」の二事に止まつている。「須言之有物」は古文家の所謂「達意」の変形である、「不作無病是呻吟」の如き抑も末小事である、まだまだ重要な事項が取り残されている。(中略) 又胡君も現状打破の径路として、直接眼光に映ずる当面の事柄から改革の叫を揚げたのであらう、それは後に胡君及び其他同志の人々によつて漸次に内部の省察が行れつつあるのを見ても首肯される。右の表紙の局部的所説に対しては慊らぬ所もあるが、それも後の論著によつて多少修正されている点もあるから、記者は姑らく傍観の態度を取つて叙事を此のまま進行させう。⁹⁾ (一九二〇年八月)

雑誌を受け取った胡適は、「京都の学者向来很多研究中国学的、現在我看这个雑誌、格外佩服。先生的大文裏很有過獎我的地方、我很感謝、但又很慚愧」(一九二〇年九月二五日)、「先生叙述中国的文学革命運動、取材很確当、見解也很平允」(一九二〇年十一月十一日)と日本の支那学研究や青木からの公正な紹介を評価しているが、青木に指摘された以上の問題点には返答していない。

「私のあの稿はもう三回書き続けるつもりです。つまらぬ小雑誌ですが続けて送りますから御覧下さい」と胡適への第一信に示されているように、その続きの二回で陳独秀、錢玄同、劉復など胡適周辺の同人の議論を比較した一方、白話文による小説や詩歌、戯曲などの創作問題にも触れていた。

興がまだ尽きなかった青木は白話詩について再度執筆を試みたが、「我的意思、尚統一回、把最近的白話詩完全論述、可是朋友們都嫌我的談論太長、讀者太倦、只得這次截止。關於白話詩、後來改稿起草」（一九二〇年十一月二〇日）と、論述が長すぎると友人から指摘があったため、後日改めて文章を起こすことにしたのである。

二、Prose Drama 建設から Post-impressionism の金冬心の芸術へ

幼少期から清楽に興味を覚え、高校時代に『西廂記』を読んで喜び勇み、大学時代に「元曲の研究」を卒業論文（その終章の見出しは「燕楽二十八調考」）として提出した青木が、視線を戯曲改良に向けたのは自然なことであった。彼は劉復が「我之文学改良觀」（『新青年』三卷三号、一九一七年五月）で主張した従来の歌劇を廃して白話劇にし、戯曲を真の文学的地位にまで向上させることに賛同した。また突如として流行が起きた崑曲をきっかけに、『新青年』の特集「イブセン号」（一九一八年六月）に代表される戯曲改良の問題に関して、錢玄同、傅斯年、歐陽予倩などが盛んに論陣を張った。ゆえに、「此奉呈鄙著『金冬心之芸術』和『品梅記』各一部。這『品梅記』是昨春梅蘭芳來航鄙国第一次排演於東京、後轉來大阪的時候、京都的有支那趣味的一輩先生、做「総見」（做一団観戯）他芸術的記念的述作。那時候恰便我得病在床、遂沒看了。只因我平生頗講究支那戲曲的原故、朋友勸我起草概論的一篇、做一卷導言、所以我把崑曲的沿革大要匆匆說過、以塞責任了。雖然很杜撰、沒有一顧價值、現在我要在『支那学』誌上、介紹先生們大家討論改良旧劇的地方、所以把這個書籍寄給先生供一興」（一九二〇年十月二六日）と書かれていたように、青木は崑曲の沿革を紹介した「梅郎と崑曲」という自作を収めている『品梅記』¹⁰⁾（一九一九年八月、彙文堂書店）を胡適に進呈したのである。さらに、青木も熾烈を極める戯曲改良の議論に参戦している。

我對於支那戲的將來的意見、很贊成先生們大家主張建設 Prose Drama 的議。文芸の散文化是世界文壇の風氣、我們不能夠逆航這個思潮、可是那些數百年間進化發達來的舊戲、也不是沒有價值。我不忍誅滅這個老東西。我的意思、要後來漸漸向上、把他到泰西 Opera 若 Music Drama 的地位——這是和那個 Prose Drama、自屬別種問題。中国和日本の音樂、視歐洲的未脫幼稚之域、他們的是 Harmonical、我們的是 Melodical、Harmonical 這一事、東洋先西洋既有了、那些唐朝的燕樂即是（中略）然而不能到完全發達遂衰亡了。這個不是很遺憾呢？將來東洋音樂的進路、當在 Harmony 方面。（一九二〇年十月二六日）

このように青木は世界文芸が散文化していく趨勢の下、胡適たちが口語體で新劇を起こそうとする主張に賛成はしているが、傳統的戲曲の価値は抹殺することなく、西洋の歌劇やミュージカルの地位にまで少しずつ向上させるべきだと考えていた。旋律重視の東洋音樂は、和声重視の西洋音樂より早く誕生したという自負があるため、東洋音樂が今後和声重視に傾くとしても、完全に染まり切ることは納得できなかったのである。これは旧劇を全面的に否定する多数意見にプレーキをかけた貴重な見解であった。このような見解に基づいてこそ、青木は「新曲と云つた所で脚本で拝見すれば、『嫦娥奔月』『黛玉葬花』『天女散花』ぐらひの手なみのものでは心細い（中略）新曲も新腔も雜劇伝奇と崑腔の研究に立脚しなければ砂上の城である」と懸念を示しながらも、「劇道新興の任は或は此の郎（梅蘭芳一著者注）の肩に懸つて居るのではまいか。往け好漢、觀客を魅すると称せらるる汝の眉目は無敵の武器であらうが、徒にお客を秋波で酔はしむるばかりが芸であるまい、^{う た みぶり}唱工に做工に大革新を企つ可きである」¹¹⁾と、梅蘭芳のために新劇に精進する正道を指し示している。

一方、「『金冬心の芸術』と云ふ小冊子を今製本中ですから出来次第お目にかけやうと思つています」（一九二〇年十月一日）と胡適への第一信で書

き記しているように、後ほど青木はこの処女作を胡適に進呈し、金冬心の絵画が西洋の印象派と肩を並べるポスト印象派の芸術だと主張し、さらに東西融合による新芸術創造への熱い期待を寄せている。

絵画一道、泰西近代 Impressionism 的傾向、也是中国数百年以還既有的、自明末迄乾隆出来の、陳老蓮、八大山人、石濤上人、龔半千、金冬心、這一輩の芸術は Post-impressionism 的先覚。只憾他們都還沒到色彩的研究地步、這不是比泰西絵画、很有遜色的地方麼？我很愛中国旧世紀の芸術、而且遺憾的事不鮮少。我很希望先生們鼓吹建設新文芸の人、把中国的長所越越發達、短的地方把西洋文芸の優所拿来、漸漸翼補、可以做一大新新的真文芸。很恨熱望、很恨囑望。(一九二〇年十月二六日)

この青木の東西融合の方法論に対して、胡適は「這真是我們一班同志的志願、但我們的能力太薄弱、恐怕破壞有余、而建設不足！」(一九二〇年十一月十一日)と、白話運動推進へと極端に走りがちな論調に懸念を示している。また、金冬心への青木の理解に対して、胡適は「彫刻図画、我能領會一点、但自己全無所能」と素直に鑑賞力の不足を認めているながら、「我看「古拙論」及先生画的『品梅記』封面、知道先生確是有所得的」(一九二〇年十一月十一日)と高く評価している。この青木の一文では、古拙を最も近代的な審美観の芸術と理解しており、「近代仏国画界に飛躍した後期印象派中の最も変り者たるマチスやゴーガン等、所謂野獸派^{レ・フォーブ}なる者の芸術も、其出发点や形式に於てこそ相違はあれ、亦一つの古拙芸術である」¹²⁾と、異質の東西芸術に対して、そこに共通する近代要素として古拙を推賞している。

注目すべき点は、この東西融合、相互補完の芸術論・方法論が胡適への書簡に再度表明されたことである。胡適により提唱された国故整理運動のために出版された『儒林外史』(亜東図書館、一九二〇年)の序文として節

られた胡氏の「呉敬梓伝」（一九二〇年四月八日）を読んだ青木は、従来儒家倫理の桎梏に反感を持っていたため、大いに刺激を受けたが、「咱們應該學西洋新文學的優處、也不可放棄東洋固有文學的優處、保守固沒有一點價值、可是忘却根本也固不好。在藝術上「個性」是可以尊重的、我要把支那文學和日本固有文學做我的文學上「個性」、把「觀察」和「方法」自從西洋文藝裡借來、建設我自己的藝術。」（一九二〇年十二月二五日）と、西洋文藝より觀察眼と方法論を借用し、東洋固有文學の長所と併せることにより自らの文學創作の個性を打ち立てたいと語っている。この引用にある「個性」は、青木の「新式標点『儒林外史』を読む」（『支那學』第一卷第七号、一九二一年三月）で詳細に述べられている。

最も私を喜ばすものは創作の態度に緊張した真面目さが見えていることだ。支那でも日本でも古來文藝に対する作家の態度が遊戲的氣分に充満している。それは儒家思想が支那人の頭の大部分を支配して以來、道を修めて余力有れば則ち文を學ぶと云ふ笑ふ可き迷信が彼等の腦裡を常に往來してゐて、文學にして美術にして所謂「小道」だとの觀念が彼等の頭にこびり着いている為だ。これは吾々が和漢の古文學に対して常に物足らぬ感じのする所以だ。「芸に遊ぶ」と云ふ暢達な氣分は嬉しいが、徹底的に遊べば其所に眞摯が生じて来る。眞摯が生ずれば深刻な大藝術が成立せねばならぬ筈だ。『儒林外史』の作者の態度は確かに徹底的遊芸の域に進んでいる。（中略）此の書を通じて私の得た印象は「迷信打破」と云ふ主張だ。（中略）此一書は之を大局から見て、作者の胸に潜んでいる「文藝至上論」の化身であると云つてよからう。「子曰」の迷信に対する大覺醒、大革命の叫びである¹³⁾。

一言で青木の藝術論をまとめると、自らを楽しませること以外は何ら欲求を持たない「遊心」なのである。

上述した金冬心の芸術論に触発されたことによる漢文訓読上の句読ミスという出来事が不意に起こった。絵画の鑑賞力が低いと謙遜していた胡適は、『金冬心之芸術』第五章「詩文」を味読する際に句読の切り方が間違った箇所を見つけ、「金冬心頁 49 有「雙禽曲」一詩、刻本の句読大誤、望先生於再版時改正。此詩当読（中略）先生以為何如？又頁 51 末行（中略）句読也被排錯了。次頁 52 首行也應読（後略）」（一九二〇年十一月十一日）と丁寧指摘している。この是正が青木には強烈な刺激となっている。

關於「雙禽曲」等二三詩詞の句読、辱高教、謝謝！我們日本人的讀書法、把中国文牽強日本の文法、迂迴環讀、字音也是千年以還轉訛的読音——設有四声的別、音韻不諧的。因為這個原故、我們所求支那學的時候、不便不少、就中研究韻文為尤甚。我的誤読、雖然全捩我的淺學、而尚一壁相被惑於這個偶像了、慚愧慚愧。我們應該廢棄這個偶像、學今日的中国音読法、否則我們的讀書力、進步不可企及：這是日本支那學者流的改進第一步。我常持此論而還沒有遑實行。前日我把這個論旨做一篇文、將掲載『支那學』第四号。將來我要誓期實行這個議論。（一九二〇年十一月二八日）

このように、誤読は自身の浅学によるものであるが、根本的には千年以上受け継がれてきた日本人の独特な訓読法に囚われたためであるので、訓読法を廃し、中国語の発音で直読する方法を学ぶべきだという意気込みを胡適に伝え、これこそが「日本支那學者流的改進第一步」という認識を明瞭に示している。なお、手紙の末尾に触れてある『支那學』第四号にこの論旨の一文を掲載することに関しては、実は第五号に載っている「本邦支那學革新の第一步」を指していると思われる¹⁴⁾。胡適に披瀝した表現とはほぼ同様だったこの題目は、まさに胡適からの強烈な刺激の証であった。青木は直下音読の方法を提起するだけでなく、当時の漢学界の現状をも念頭

に入れ、音読の基準に関して二つの草案を案出している。第一案は北京音に拠るものである。これは最も現実的だが、入声がなくなったのが古文読解に支障をきたす。第二案は従来の漢音呉音いずれかに拠るものである。これは詩の音律を楽しめるが、四声の区別が明らかに発音できないところに欠点がある。「何れにしても直下音読は目下の急務だ（中略）目も口も頭も転倒しないやうに習慣を付けたら、読書力が大いに増進に違ひ無い」¹⁵⁾と性急さを隠すことなく力強く訴えている。

また、胡適は句読の間違いを指摘したにとどまらず、青木の著作で述べられた金冬心の放恣な詩風、飄逸な筆致に共感を覚え、「覺得先生所說尚有未尽（中略）我定要做一篇「一百七十年前的新体詩」、專論金冬心的詩。将来此文若做成、我應該感謝先生給我的 inspiration！」（一九二〇年一二年十四日）と、青木の言い尽くせなかったところを補足し金冬心の新体詩について論考を一本書こうと表明している。しかし、胡適の文集には、このような文章は見当たらなかった。興味深いことに、青木も胡適の「吳敬梓伝」からインスピレーションを得ている。「将来我也要写一篇小説——題未定——取材於吳敬梓伝裡。描写一位清貧的藝術家、背景（background）是乾隆時揚州」（一九二〇年十二年二五日）と、吳敬梓をモデルにして小説を創作したい旨を伝えているが、結局は作らなかったようである。

ここで、絵画に才能がない胡適が金冬心の新体詩を論じる理由を補足したい。それは当時の胡適は白話詩の理論作りと創作に最も熱中している時期だったということである。自作の白話詩をまとめて国現代文学史上で初めての白話詩集『嘗試集』（亜東図書館、一九二〇年三月）を世に出している。「青木文庫」に所蔵されている『嘗試集』の表紙見返しの遊びに「胡適敬贈 九、九、二七」という胡適の自筆署名がみられる。時間的に言えば、これは青木宛の第一信と同時に郵送したものだと分かる。この詩集に対して、青木は「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」に、「胡君が茲に火の手を揚げる迄には可なりの熟考と研鑽とが費された。少しの銜気も山気もない

純なる心と熱烈なる欲求と、真摯なる態度とを以て飛躍の準備が急がれていた。決して突如として躍り出た人騒がせな気まぐれ者では無かつた。それは最近出版した詩集『嘗試集』の自序に可なり細しく其の経過が述べてある。勿論之は主として彼の新詩製作に関することであるが、一般の文学革命に就ても其の詩論發生の徑路を見るに足るのである」¹⁶⁾と評価を述べている。この一文を読んだ胡適は青木の卓識に感心し、「我曾寄『嘗試集』再版一本給先生」(一九二〇年十一月十一日)と、青木へ再版本を一冊送っている。さらに、『支那学』創刊号の「新刊紹介」欄では、情熱溢れる青木の推薦文が見られ、「僕は彼がまだずんずん進んで行く可き未来を有していることを信ずる」¹⁷⁾と書かれている。また、青木は胡適の新詩「我的兒子」を日本語に訳して『支那学』第一卷第八号(一九二一年四月)に投稿している。

なお、青木の論文「本邦支那学革新の第一歩」(一九二〇年十月)は胡適の『嘗試集』の着荷よりやや遅れている。文学革命の実践書たる『嘗試集』から、その徹底的に白話を主張する高ぶりを感知した青木は、改革の炎をさらに燃え立たせ、『嘗試集』への所感代りであるかのように、「本邦支那学革新の第一歩」を執筆したのである。思想上で両氏が共振しあった一例とも言えよう。

三、『水滸伝』各版本の成立をめぐる切磋琢磨

一九二〇年八月に上海亜東図書館によって西洋式句読点が付いた『水滸伝』が出版された。国故整理運動を通じて伝統思想や文学の研究を大いに提唱していた胡適の「水滸伝考証」(同年七月二七日に脱稿)はその序文を飾っている。胡適は進化主義的文学観に基づいて、講談風の『宣和遺事』や『雙献頭』『燕青博魚』『李逵負荊』などの雑劇を緻密に分析した上で、小説『水滸伝』は従来多くの梁山泊の人物にまつわる物語や戯曲から生まれたもので、手元の金聖嘆による改作の七十回『水滸伝』の成立時期は周

憲王（一三七九—一四三九）の雜劇と『金瓶梅』との間（明代の中期）にあると論断している。同年、この文章を読んだ青木は、胡適の結論に概ね賛成している。これは翌年四月に発表された「水滸伝が日本文学史上に布いている影」の一文から窺える。

『水滸伝』が何時出来たかをはつきりと断定し得る確証は容易に見出されまい。一般には元代の著だと見做されているが、既に清初の周亮工は明初洪武頃の作だらうと目星を着けているし、先年狩野直喜先生は水滸伝説を扱った戯曲との比較研究からして周氏の明初説に裏書された。昨年胡適氏も亦別に之と全く同様の方法で、もつと精密に『水滸』製作の径路を考証して明の中葉まで時代を引き下げている。僕は胡君の説に多少賛同しかねる点はあるが、大体に於て服す。¹⁸⁾

実はこの青木の一文や、後の胡適の「水滸伝後考」（一九二一年六月）は、二人の切磋琢磨の上に生まれた成果と言える。胡適のこの文章を読んだ青木は、直ちに胡適に書簡を送り、「很佩服」（敬服いたしました。一九二〇年十一月二〇日）と伝え、さらには、京大文科大学の機関誌『芸文』に「水滸伝と支那戯曲」を寄稿した狩野直喜が胡適の論文を気に入っているということも告げている¹⁹⁾。この旨の書簡を読んだ胡適は、「先生前函曾提及令師狩野先生的水滸考、又蒙先生許我搜求登載此文の芸文雑誌。此文我極想拜読一遍、若蒙先生代覓得那一号芸文、千万寄我一看！」（一九二〇年十二月十四日）と、ぜひ狩野の例の論文を読みたくて、青木に雑誌『芸文』の郵送を依頼したのである。この要望に応えるために、手元にもこの雑誌が無く、容易に入手もできない実情のために、青木は友人からこの雑誌を借りて胡適に送り、読み終わってから返却するよう伝えたのである。

狩野先生的「水滸伝考」曾經登載『芸文』第一年第五号（明治四十

三年八月、宣統二年)、我丢了此号、坊間也容易求不得、我想很遺憾、可是先生若不厭一見之後返擲我的煩、就我借朋友的、寄先生送罷！不知先生貴意如何？（一九二〇年十二月二五日）

青木の柔軟かつ迅速な対応に対して、胡適は「『芸文』倘蒙借觀、我定謹慎收藏、閱畢即寄還你。」（一九二一年一月二四日）と、間を置かずに返信している。この論文は胡適に直接的なヒントを与えなかったとはいえ、その中に使われている資料と得られた結論が彼の「水滸伝考証」とほぼ一致していることは、胡適を大いに喜ばせた。一九二一年六月十一日に脱稿された「水滸伝後考」では以下のように述べられている。

青木先生又借我第一年第五期『芸文』雜誌（明治四十三年^{ママ}四月）、内有日本京都帝国大学狩野先生的「水滸伝与支那戯曲」一篇。狩野先生用的材料——從『宣和遺事』到元明的戯曲——差不多完全与我用的材料相同。他的結論（中略）也和我的「水滸伝考証」的結論相同、這種不約而同的引証使我非常高興。²⁰⁾

実はこの胡適の「水滸伝後考」は青木から提供された材料を抜きにしては成立できなかった。この論文の最後では、「我最感謝我的朋友青木正児先生、他把我搜求『水滸』材料的事看作他自己的事一樣、他對於『水滸』的熱心、真使我十分感激」²¹⁾と、自分の研究のように全力を注いで関連資料を探し求めてくれた青木に謝辞を述べている。当時、日本の水滸学上の恩人と呼ばれる岡島冠山の略伝を作ろうとしていた青木は、彼の使っていた中国語がどこの方言かについて胡適に尋ねたことがあった。その流れで、岡嶋の翻訳書に三種の『水滸伝』があることも教わったのである。というのも、「僕は胡君の説に多少賛同しかねる点はある」と青木が評したように、ただ数種の七十回本『水滸伝』のみに基づいて仮説として提示された

胡適の「水滸伝考証」の実証性には不安を少し持っているからであった。

最後我也要請先生幫忙一件、不知道可以嗎？日本正徳享保時（自康熙末年至雍正）有一位研究支那白話文学的先覚者、姓岡嶋、名璞、字玉成、号冠山。他觀了許多小説、極精通了白話。我要做他的小伝、略考一考了、只有一点未能論断的——即他学的中国話是什麼郷土の方言？（中略）。他的支那語学書有九種、我見得的四種、所藏的三種。其他還有『忠義水滸伝』二卷、自第一回至第十回、附訓点刊布。『通俗忠義水滸伝』七十卷、把聖嘆百回本完全翻譯。『通俗皇明英烈伝』二十三卷、把徐文長の『雲蹤奇合』翻譯等等。我別寄先生『唐語使用』六卷之内二本、看一看、先生若替我查一查這書的口音、幸虧賜教、我就感激極了。（一九二〇年十二月二五日）

「我去年做水滸考証時、只會見着幾種七十回水滸、其余的版本我都不曾見着」²²⁾と胡適が打ち明けているように、『水滸伝』は中国で入手しがたいのに、日本にそのいくつかの版本があると聞き及び、胡適は狼狽したのであった。胡適から青木への返信では、岡嶋の翻譯による前十回の『忠義水滸伝』と、明代の百回本『忠義水滸伝』とを代理で購入してほしいと切に懇望している。また、その時期に『水滸伝』と『征四寇』とを合わせた六十六回本は入手したことも伝えている。

先生說岡嶋の著作中有『忠義水滸伝』二卷、自第一回至第十回、附訓点刊布。此本是否聖嘆批本？若是明本百回本的前十回、我極想得着一部、不知能求得着嗎？明代之『忠義水滸伝』（百回本）不知在日本尚可購買嗎？如能購得、我極願買一部。我近来買得一部一百十五回的『水滸』、是一種六十六回本与『征四寇』合並起来的。（一九二一年一月二四日）

胡適の依頼を受けた青木は直ちに実行に移した。「謝々你十、二、三、的信、与你寄贈的『忠義水滸伝』二冊」（一九二一年二月八日）と胡適の返信にあるように、二月三日に青木は二冊の『水滸伝』を胡適に送っている。ただし、その一冊は胡適の望んだ金聖嘆評点本ではなく、李卓吾評点の百回本を底本にして、岡島冠山によって前十回が訳された『忠義水滸伝』であった。その見返しには「敬贈胡適之先生、日本青木正児。大正十、二、三」と青木への題辞が見られた。胡適は、この青木が送ってくれた『忠義水滸伝』を、手元にある金聖嘆評の七十回本及び英雄譜本と照らし合わせることで、その成立の概略を解明しようと試みたのである。

這兩本『水滸伝』使我非常歡喜。我拿他与現行金聖嘆本及我新得的百十五本对照着讀了幾回、我的觀察是：（一）此本的底本、確如你所說、是明李卓吾評百回本。（二）此本的文字言語与金本相差甚微、所不同者只在金本減少許多駢偶的累贅句（中略）及許多庸劣的韻語（中略）。前人多說金聖嘆多所改竄、此本可証其誣枉。此又可証我說的「新百回本的前七十回、与今本七十回沒有什麼大不同的地方」。（三）此本与百十五回本大不同。凡金本刪去了的部分——即上文說的駢句与韻語二項——此兩本皆有、又皆相同。有數處、此本之駢句与韻語反比百十五回本更繁多。但凡金本与此本相同的文字与語法、百十五回本却顯出刪節的痕跡。此似可助証我說的「百回的水滸善本大概是用七十回本來修改原百回本的」一個假設。（一九二一年二月八日）

このように胡適は、三つの版本の比較を通じて、前の論文「水滸伝考証」で提示した仮説「明末に成立した百回本『忠義水滸伝』の前七十回は金聖嘆評の七十回本と大した違いがないこと」、さらに「百回本の水滸善本は誰かが金聖嘆評の七十回本を使って、明初に成立した最初の百回本を改定したものであること」を実証したのである。加えて、金聖嘆が以前の『水滸

伝』を多く改竄したとの前人の説を覆せるとも胡適は指摘しているが、青木は進化主義の文学観の視点から、金聖嘆本では以前にあった駢文と韻語が削除されたため、本来の姿が破壊されたと反論を出している。

關於你的對於百回本の text 觀察、我有一事不能同意底地方。從我的意見、小説的起原在演史、演史使人聽的、所以往往插入駢句和韻語、以娛俗耳。今觀察百回及百二十回本、繁用這個手段、可見却存小説的旧觀。(中略)金本刪除這個駢句和韻語、從文字手段上而說、就是做一進步、從小説形式上而論、却是損傷旧觀了。自從這個見地、我也敢說、聖嘆改攛了水滸伝了！他的改攛癖不但『水滸』而且『西廂』『三国』比比皆是、他是很大胆、很不羈的一個評家、一徑他手里、悉做自家藥籠中的東西而改出來。(一九二一年二月十七日)

文飾や百二十回本の後半第七十二回以降をすべて削除することはともかくとして、金聖歎評の七十回本に挿入した批評は、自ら改作した部分を褒め称える自画自賛も多く、露骨な依怙鬚眉の傾向が強かった。この角度から見れば胡適の見解は成立しなかったのである。

この版本の『水滸伝』にとどまらず、さらに青木は胡適のために全力で百十回本と百二十回本を探し集めた。

你許我抄録京都府立図書館の百二十回本『水滸全書』の目録凡例等、感謝々々！此事不必急々、且等你有閑暇時再做。但我盼望你托你相熟的書店去替我訪求一部百二十回的水滸全書。此書既然內閣文庫与京都府立図書館皆有收藏、大概尚不難尋訪。此本（百二十回本）雖不如百回本之重要、但必是狠有用的參考材料。(一九二一年二月八日)

「你許我抄録（後略）」の文面から、これより前の書簡で、内閣文庫（現・

国立公文書館）と京都府立図書館に百二十回本が収められているので、その目録や凡例を写し取ると青木が胡適に約束したことが分かる。しかし、現存している両氏の往復書簡集からは、この約束の内容は見当たらなかった。胡適から青木へ百二十回本を代理購入してほしいという依頼に対して、「『水滸』百回若百二十回本、我的意思無論替你熱心訪求、可是此書訪求不然容易。如京都帝国大学支那文学研究室十数年来訪求這書、而至今還搜得不出」（一九二一年二月二七日）と、青木はその入手し難い現状を丁寧に説明している一方で、「你不必失望、冀假我若干的時期、我誓替你訪出来！」と慰め、本探しを継続する強い意志を胡適に表明している。なお、この書簡が出された四日前に（一九二一年二月二三日）、青木は京都府立図書館から百二十回本の序文と凡例、目録を十四枚写し取り終え、それを直ちに胡適に送っている。この資料の末尾に「右明李卓吾評閱水滸全書序凡例目録、以日本京都府立図書館蔵本、抄録」²³⁾と記されている。

胡適の望んでいた百二十回本が見つかなかったが、「岡島璞の水滸訳本、木版的原本很少、可是鉛印洋装的新本容易求得的、不久我到城中訪求一部寄上你罷」（一九二一年四月八日）と胡適宛の書簡で書かれていたように、五月四日に青木は李卓吾評、岡島冠山訳の百回本の『通俗忠義水滸伝』（七卷、宝暦七年発売、明治四十年東京共同出版株式会社印行、大正二年再版）を胡適に送っている²⁴⁾。その本の見返しには「胡適之先生狠熱心研求水滸的考証、他還沒見李卓吾評点百回本、我姑寄上他這訳本以做一助。正児、十、五、四」と書かれている。

青木は胡適に、京都府立図書館の百二十回本の目録などを抄録してあげたのみならず、恩師の鈴木虎雄が所蔵している百十回本『二刻英雄譜』の書誌情報なども胡氏のために書き写している。これについては、現存している二人の往復書からは明確な記録が見つかってはいないが、胡適は青木への書簡で、この版本と最近入手した百十五回本を簡略に比較している。

我新得的百十五回本『水滸伝』、頗像你来書說的某氏所藏『二刻英雄譜』、也是一部三国水滸合伝、上欄為『忠義水滸伝』、下欄為『三国演义』。這書又名『漢宋奇書』。此間没有此書的好版本、但頗可供我的參考。倘蒙你替我訪得一部百回本的『忠義水滸伝』、我就真要歡喜欲狂了。百十五回本的、我不久当寄一部贈送你。(一九二一年二月八日)

さらに、胡適の「水滸伝後考」に取り上げられた六つの版本の五番目に、「百十回本の『忠義水滸伝』。(日本京都帝国大学鈴木豹軒先生の藏) 這也是「英雄譜」本、内容与百十五回本略同(中略) 可見此書刻於明末或清初、大概即是百十五回本的底本」との記述がある。この記述から見れば、これが間違いなく青木からの資料であつたと分かる。

青木は胡適に水滸の資料を提供しただけではなく、「我把你惠的『英雄譜』和清初(或是明板)的旧本百十回較一較了、結果別写給你知道。写完的時候、窗外噪雀告我天明了」(一九二一年四月八日)と書いているように、胡適から届いた百十五回本²⁵⁾を鈴木虎雄の『二刻英雄譜』と比べ、この百十五回本を明末万暦の刻本だと推定し、その論証を原稿十一枚にまとめてその日の夜明けまでに書き上げている²⁶⁾。その末尾には「胡適之先生狠熱心水滸的源流、将来要做一全水滸考証、我深感他的高志、写這調查書給他做一助。青木正児、十、四、八」と執筆理由を簡潔に記されている。しかし、「可惜鈴木先生所藏已缺前面的序文与回目了。我懸揣此本之序与我寄贈你的百十五回目相同。(中略) 此本初刻成時必在明崇禎時」(一九二一年五月十九日)と、胡適が具体例を挙げてこれに反論を出したため、青木は、「關於英雄譜的初刻年代、你說的不錯、我現在『支那学』第九期上推定万暦刊的、這是没有根拠、應該訂正從你的意見」と素直に受け入れている²⁷⁾。

青木から四種類の『水滸伝』原本や抄録資料、さらには十一枚の論証まで揃ったことでいよいよ胡適の『水滸伝』成立論は飛躍的に精度を高める

こととなる。「我想先把現有的各本水滸伝序例与回目排列作一個比較表、然後尋出各本的前後与来歴。這篇新考証若做得成、差不多全是你的幫助的結果」（一九二一年五月十九日）と胡適は青木に謝意を表している。件の「水滸伝後考」は青木の協力なしには成し遂げられぬ画期的論文であった。論考に取り上げた六つの版本のうち四つが青木からの提供であったため、揺るぎない論拠の基盤を形作ることができたのである²⁸⁾。

一方、胡適に全面協力した青木も、胡氏の研究熱に感化されていった。「我此時要做日本文学史上的水滸一篇小論、做成之後、在『支那学』上給你看看。那水滸不但在中国文学史上重要的作品、並且在日本文学史上影響很多。而這個現象的起点是那岡島的訳本、一出此書、多数翻案（脱胎於水滸）の小説追従来了」（一九二一年四月八日）と表明しているように、『水滸伝』の日本輸入時期や翻案作品を考察して、「水滸伝が日本文学史上に布いてゐる影」（一九二一年四月十八日）を完成させたのである²⁹⁾。

このような『水滸伝』をめぐる切磋琢磨の引き金は、岡島冠山の学んだ中国語がどこの方言かという青木からの質問であった。結局、胡適は「岡嶋璞の『唐語使用』、我已転請錢玄同先生拿去察看、不久他定有報告」（一九二一年一月二四日）と同僚の言語学者錢玄同にこれを解明してもらったのである。後に胡適は「岡嶋璞の書、錢玄同先生因新近死了一個兒子、又病了一個兒子、心境不佳、故至今還不曾研究完畢、請你原諒他」（一九二一年二月八日）と、錢氏の家庭事情で研究が出来なくなったことを青木に説明している。結局、青木はこの疑問を解明できずに「岡島冠山と支那白話文学」（一九二一年五月二一日）を完成させたのであった³⁰⁾。

四、青木の「熱心与高誼」が結実させた胡適の『章実齋年譜』

「我做『章実齋年譜』的動機、起於民国九年冬天讀日本内藤虎次郎編的『章実齋先生年譜』」³¹⁾（一九二二年一月二一日）と『『章実齋年譜』自序』の冒頭に書かれてあったように、『支那学』第一卷第三、四号（一九二〇年十

一、十二月）に連載された内藤湖南の「章実齋先生年譜」を読んだ胡適は、「最可使我們慚愧的、是第一次作「章実齋年譜」的乃是一位外国的学者」と、その慚愧の念と驚愕ぶりを率直に打ち明けている。それゆえに、胡適は内藤の作った年譜を基に、章実齋の生涯やその学問上の思想変遷を詳しく記述しようと固く決意したのであった。その成果として現れたのが「比「内藤譜」加多幾十倍」の『章実齋先生年譜』（上海商務印書館、一九二二年）である。

青木から届いた『支那学』では、その「序説」部分に「章実齋先生年譜」を載せており、「去年鈔本章氏遺書十八冊を得て之を検するに、其の尽く文史通義以外に溢出する全集の大部分なるを知ることを得。固よりこの鈔本にも目ありて文なき者あり、又他の雑誌其他に已刊せる者にして、この鈔本に缺けたる者あるも、章氏遺書の百中の九十八は、已にここに備はれり」³²⁾（一九二〇年十一月）と、章氏著作をほとんど網羅している十八冊の『章氏遺書』の完備が説明されている。ここを読んだ胡適は垂涎を禁ずることができなかったであろう。そこで、胡適は青木への書簡に、この鈔本が刊行される計画があるかどうかと、もし当面その計画がないのであれば、せめてその目録だけでも見せてほしいと、青木から内藤に尋ねてもらえるように懇願を書き記している。

『支那学』第三号上有内藤先生作的「章実齋年譜」一篇。我也是愛讀章氏的人、但章氏遺書此時狼不易得。『文史通義』之外的遺文、我僅搜得四五十篇。内藤先生說他去年得鈔本章氏遺書十八冊。這一句話引起我的讀書饑涎不少！内藤先生是否有意刊布此項遺書？若一時不刊布、他能許我借觀此書的目錄嗎？章実齋一生最講究史法、不料他死後竟沒有人好好的為他写一篇伝！内藤先生的年譜確是極有用的材料。他若能把他所得的遺書刊布出来、豈非支那学上一件大快事！請先生替我問一問内藤先生、好嗎？（一九二〇年十二月十四日）

この書簡が届いた青木は、「章氏遺書的事、不日我應該問一問内藤湖南先生、再寄先生知道」（一九二〇年十二月二一日）と、近いうちに内藤に問い合わせることを承諾し、その旨をすぐに胡適への返信にしたためた。三日後、青木が内藤宅を訪ねたところ、内藤は上京のため留守であった。一日も早く『章氏遺書』を読みたい胡適の心情を察した青木はこの翌日、胡適に手紙を書き、読者の関心が薄いので刊行はとても無理だろうが、その目録のみならず、本文までも内藤の所から借り出せるように努めるので、もう暫く待ってほしいと伝えている。

關於先生下命的章氏遺書之件、昨天我到内藤先生的家、不幸他上東京去、所以遂問不得了。料想刊布這書現在可不能实行：日本漢学界還在很低級的地步、那『文史通議』一書尚且讀者絕少、何況其他章氏的遺書呢！我曾經一見『古學彙刊』裏『章實齋文鈔』、這内藤先生所藏的鈔本遺書還沒見哪。他若許先生借觀這部書——不但目錄、而且本文也一共——我也很歡喜、請等一等後報！（一九二〇年十二月二五日）

その頃、胡適は青木からの連絡だけをひたすら待っていたわけではなく、国内の『章氏遺書』収蔵先を積極的に捜し求めている。浙江図書館にあることを調べ出すが早いか、友人にその目録を謄写してもらおうとしたが、すでに活字で印刷された後だとわかった。これは当時中国で「最完全的章氏遺書」でありながら、「校對不精、錯誤甚多」でもあった。精読を通じて校正した胡適は、「若内藤先生未見此書、我可以寄一部贈送給他、因為寄刻本比寄鈔本更容易些。他也可以用此本校他的鈔本、把校對的結果發表出來、給我們公用」（一九二一年一月二四日）、内藤に新刊書を進呈し、これをもって彼の鈔本と照合してから結果を公表すべきだと提言している。また、「我想『章氏遺書』目錄你已收到了。後來内藤先生寫別種章氏著書書目——他所藏的——使我知道你、所以一共封入在此」（一九二一年一月二七日）と

いう青木からの書簡により、胡適が一月二四日前後に青木に書き写してもらった『章氏遺書』の目録が届いたことがわかる。内藤の書いた章氏の別種の著書書目も同封されていた³³⁾。

青木からの目録を読んだ胡適は感激に堪えきれず、「我不知道應該怎樣謝你的熱心与高誼！我一定保存此書、作為我們友誼上的一件紀念品」（一九二一年二月三日）と青木の情熱に深く感謝し、また新たに青木に依頼を出している。「我在印本目錄上、已注出内藤本所無的各篇了。現在我且把内藤本比我所藏多出的各篇目写在下方（中略）以上各篇中、若先生能設法使我得讀「礼教」「所見」兩篇、我就感激不尽了」という文面から、刊行本より内藤所蔵の鈔本に余っている「礼教」「所見」の二篇をぜひ読みたいという要望が分かる。さらに興奮に駆られた胡適は翌日、青木にもう一通手紙を送り、内藤の「章実斎先生年譜」を熟読した上で気になっていたことを二点ほど指摘している。

此譜搜集的極完備、使我非常佩服。但有一小点：『中国学报』登出的「史籍考目」及「史籍考序例」乃是实斋一生的一件大事。『史籍考』的原稿存在畢沅家、畢死後、实斋取未成之稿、整理成書。此事当在实斋六十一歲至六十三歲之間。此事似当補入。又此譜末頁（四期、五〇頁）有小誤：「嘉慶四年戊午、先生六十二歲。是歲高宗皇帝崩、和珅賜死」当作「嘉慶三年戊午、先生六十一歲。（疑誤脫去一年的事实？）嘉慶四年己未、先生六十二歲。」請你一問内藤先生、是否誤脫一年？（一九二一年二月四日）

胡適の指摘に対して、内藤はまず感謝の意を表し、それから「嘉慶四年の干支確是己未、是一時誤写。而嘉慶三年因為沒有緊要的事、所以省略了、不是誤脫一年的事。恰好把你說的『史籍考』一事、補正這一年起来、尤為妙計」（一九二一年二月二七日）と青木の書簡に示されているように、一点

目は年譜の漏れを補えるので完全に同意し、二点目は不注意による誤記であり、一年の誤脱ではないと返答している。また、「礼教」「所見」の二篇を書き写す希望に関しては、「内藤本多出的「礼教」「所見」二篇、我已經借来了、不久応写著寄上你看」と、前述の内藤の返答に同封して送ったが、胡適からの返事はなかった。一年後に刊行された胡適の『章实齋先生年譜』の自序には、「我這部小書の編成、很得了許多認得或不認得的朋友的幫助。我感謝内藤先生的年譜底本、感謝青木先生的幫助」と、青木の尽力に謝辞が記されていた。青木と内藤に進呈されたこの著書の表紙にはそれぞれ「敬贈青木先生 胡適」、「敬贈内藤先生、表示敬礼与謝意 胡適」と自筆が添えられていた。これも水滸伝の考察のように青木の協力なしには成し得なかった著作なのであった。

また、同年の『支那学』第二卷第九号には、内藤の「胡適之君の新著章实齋年譜を読む」が掲載されている。この文章では、「胡君の年譜体例論は、一家の見識たるを失はず、其の長処短処並び挙ぐるを可とすべきが若きは、誠に異論なき所なり。然れども年譜中に在りて、思想学説の変遷、他の大師に対する批評の可否にまで論及する如きは、創例として絶対に標準とすべき者なりや否や、猶ほ審議を要すべし」（一九二二年五月）³⁴⁾と、胡適の作った新たな年譜のスタイルに疑義が呈されたが、胡適の著書によって自分の作った年譜にある誤謬を十二か所訂正できたため、その感謝も表されていた。これはまさに『支那学』を媒介として切磋琢磨された日中間の学術交流の典型的一例と言えるであろう。

五、胡適を通じて広がっていく交流のネットワーク

青木への返信から『支那学』が次々と胡適の手元に届いていたことが分かる。胡適がこの『支那学』を、青木の「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」に触れた『新青年』の同人や北京大学の同僚に紹介したということが書簡からも裏付けられている。例えば、「兩冊『支那学』都借給周作人先生

兄弟看去了（他的哥哥周豫才、仮名魯迅、也是深知日本文芸的人）。他們也狠喜歡這個雜誌」（一九二〇年十一月十一日）と、『支那学』二冊を周氏兄弟に貸したことが書簡に明記されている。この情報を告げられた青木にはさぞや望外の喜びだったことだろう。件の論文には周作人の論文「人的文学」とその翻訳の業績、魯迅の小説『狂人日記』が著しく賞賛されていたからである³⁵⁾。このように、直接に周氏兄弟とやり取りをしようとしていた青木は、「今写一信、敬呈二周先生、又敬贈『支那学』自一号至三号三本、托先生請遞周先生」（一九二〇年十一月二〇日）と書かれているように、手紙と『支那学』三冊を周氏兄弟に渡してもらうよう胡適に託したのである。

魯迅の日記を調べてみると、一九二〇年十一月二七日の記録に「下午得青木正兄信、由胡適之転来」³⁶⁾という内容が見られる。この魯迅宛の一通目は魯迅書簡集にないことから紛失のようであるが、青木から魯迅宛の一通目の内容は、以下の魯迅から青木への返信から概ね推測できる。

ワタクシハ先日胡適君ノ処ノ支那学デ、アナタノ書イタ支那文学革命ニ対スル論文を読ミマシタ。同情ト希望ヲ以ツテ然モ公平ナル評論ヲ衷心ヨリ感謝シマス。ワタクシノ書イタ小説ハ幼稚極ナモノデス。只ダ本国ニ冬ノ様デ歌モ花モナイコトヲ悲シンデ寂寞ヲ破ルツモリデ書イタモノデス。日本ノ読書界ニ見セル生命ト価値トヲ持ツテ居ナイモノダロト思ヒマス。コレカラ書クハ又書クツモリデスガ前途ハ暗澹デス。コンナ環境デスカラモツト諷刺ト詛呪ニ陥ルカモ知りマセン。支那ニ於ケル文学ト芸術界ハ実ニ寂寥ノ感ニ堪エマセン。創作ノ新芽ハ少シク出テ来タ様デスケレド長生スルカドーカサッパリ解リマセン。新青年モ近頃随分社会問題ニカタムイテ文学方面ニモノハ少ナク成リマセン。支那ノ白話ヲ研究スルニハ今ニ於イテ実ニ困難ナコトデアルト思ヒマス。唱道シタバカリデスカラ、一定シタ規則ナク各人銘々勝

手ナ文句ト言葉ヲ以ツテ書イテ居マス。錢玄同君等ハ早く字引ヲ編纂スルコトヲ唱道シテ居ルケレドモ、未着手シマセン。(旧暦は一九二〇年十一月十四日、西暦は一九二〇年十二月二三日)³⁷⁾

「書イタ小説ハ幼稚極」「本ノ讀書界ニ見セル生命ト価値トヲ持ツテ居ナイモノ」との返信内容から、それ以前の手紙で青木が魯迅に小説を書き続けるように励ましていたと考えられる。また、「白話ヲ研究（後略）」から魯迅が青木から白話運動の現状を尋ねられていたことも分かる。「前途ハ暗澹」「諷刺ト詛呪ニ陥ル」「実ニ困難」との文面から新文化運動の行方への不安が反映されている。この態度は青木の情熱的なまでの期待とは対照的である。この認識上の懸隔があったからこそ両氏のやり取りは継続に支障があった。往復書簡が二通しかないことからそれを窺うことができる。また、一九二一年八月二五日付、魯迅の周作人宛の書簡に「『支那学』不來、大約不送矣、尹黙説、青木派亦似有点謬」³⁸⁾とあり、青木からの『支那学』進呈が途絶えたことが分かる。

一方、周作人への一通目（魯迅と同一のものも可能）も現存の資料から見つかってはいない。胡適から青木への書簡には、「周先生想訳成漢文、但因文尚未完了、故不會動手」（一九二〇年十一月十一日）と、周作人が当時連載中の青木の件の論文を翻訳したがっていたことが書き記されている。また、周作人の日記を調べてみると、「得適之函、『品梅記』一冊」（同年十一月十三日）、「得適之函、『金冬心ノ芸術』『支那学』各一冊」（十一月十九日）、「得適之転來『支那学』四号一冊」（十二月十三日）などが見られ、胡適が青木から進呈された書籍を周作人に転送したことが分かる。また、「得青木君十九日函」³⁹⁾（十一月二四日）との日記から周作人宛の書簡の完成時期は十一月十九日だと分かる。これに対する周作人の返信は以下の通りである。

『支那学』を御送り下されてありがたう。先日胡適之君から第四号を受け取りました。十分の敬意と興味とをもって拝見して居ります。支那学は本場の支那よりも貴国の方はより学術的に研究され、また多くの有益な論文や書物が発表されてる事は豫ねて知って居りますが、あなた方の雑誌を見ますと、支那現代の思想界の傾向にも注意を払ってゐる事は殊更に私達の興味を引きました。過去の文化ばかりでなく、現在の支那の人間の、微弱ながら、光明へとの内面的努力をも認めて日本に紹介して暮れた事を感謝します。⁴⁰⁾ (一九二〇年十二月十五日)

中国より積極的に推進されてきた日本の支那学研究は、当時の中国の思想状況への注目を評価している旨が『支那学』誌上に見られるのだが、「微弱ながら、光明へとの内面的努力」という新文化運動へのポジティブな捉え方は魯迅のそれと異なっている。青木宛の周作人の書簡は八通が現存しているが、二通目が一通目の四年後（一九二五年一月十六日）になっており、新文化運動に関する内容がほとんど見られなかった。周作人との交流が胡適ほど弾まなかった理由は、当時の周作人が武者小路実篤、有島武郎、志賀直哉など白樺派同人の小説で表出している人間の個性尊重、内的生命の重視に夢中になっており、青木に注目された新文化運動の進展と焦点がずれていたからであった。

最後に青木と呉虞との交流について少し言及しておきたい。青木が胡適や周氏兄弟と進んで連絡を取っていたのとは異なりを見せていた。呉虞が自作『呉虞文録』（亜東図書館、一九二一年十月）を青木に進呈したことが両氏のやり取りの発端であったが、「在胡适之先生处拝読先生『支那学』上大著、钦佩極了」（一九二一年十一月十九日）と青木宛の一通目に書かれているように、呉虞も胡適を経由して『支那学』の存在を知ったことがわかる。また東京に留学していた甘廉泉という若者に頼んで、『支那学』第一巻を全て購入してもらったことも書簡からわかっている。

筆者の調査によって、青木と呉虞との往復手紙の数は三十七通にも達していたことが明らかになったが、その内容は主に儒教批判と書籍購入依頼に集中していた。『呉虞文録』に載っている儒家倫理観を激しく攻撃する「家族制度為専制主義之根拠論」、「吃人与礼教」などの論文が青木を魅了したことで、青木は直ちに「呉虞の儒教破壊論」を執筆し『支那学』第二卷第三号（一九二一年十一月）に投稿している。「現代支那の新人は誰しも儒教に籠統された旧道徳に反感を持っている、然し彼の如く痛快に非儒の論を絶叫した者は未だ無い」⁴¹⁾と呉虞の「反儒教」姿勢を絶賛していたことが分かる。この呉虞の主張に青木が共鳴を覚えた理由には、幼少期に父によって叩き込まれた『論語』や『孝経』への反発のほか、当時東大を中心に行われた護教的で陳腐な儒学研究への嫌悪もあった。「東京の学者、於其研究態度、多有未純的地方、他們对孔教猶尊崇偶像、是好生可笑。我們京都的学徒、這等迷信很少。把那四書五經、我們漸漸懷疑起来了」⁴²⁾（一九二二年一月二七日）とあることから、「呉虞の儒教破壊論」を青木の伝統的漢学研究と決別する宣言書と見なしてもよからう。この論文に続き、呉虞の論文「荀子を通して見た墨子学説の閑却されたる一面」（一九二二年三月）、「荀子の政治思想」（一九二三年一月、五月）も『支那学』に掲載されている。

また、呉虞が自作の宣伝や先秦諸子著作の購入を青木に頻りに依頼していたことも注目に値する。「大著『文録』（再版）一冊辱惠、経畏友青木先生之手接到、捧受不堪感佩」⁴³⁾（書き上げた日付は不明であるが、一九二三年三月十八日の呉虞日記にはこの手紙を書き写している）と、青木を経由して『支那学』のもう一人の創刊者本田成之に『呉虞文録』を進呈しているが、その理由は本田が『支那学』で「法家と儒家との関係」（一九二三年一月）を発表し、そこで呉虞を陳独秀、胡適と同列に扱い、黄宗羲の後を継いだ今をときめく非孔主義の人と推奨したからであった⁴⁴⁾。「久保天随君的『荀子新釈』三本、擬乞先生代覓一部寄下」⁴⁵⁾（一九二一年十二月十四日）

のように、青木には諸子に関する著作の購入が集中的に依頼されていた。

二人の書簡をまとめるならば、儒家倫理観の批判により築かれた共同の思想基盤は、時間の経つにつれて、当初の熱意が次第に冷め、一般の応酬に陥り、書籍購入のような事務的なことに傾いていった後、自然消滅に終わってしまったと言えるのである。

終わりに

本稿では雑誌『支那学』を紐帯にして生き生きと日中学者の学术交流の原風景を生き生きと再現してみた。陳腐な漢学研究を切り捨て、実証的方法論によって新たな「^{シノロジー}支那学」の構築を目指そうとする青木たちは、古典中国と現実の中国を断絶的に捉える学界内外の憂鬱に新時代の息吹を吹き込み、『支那学』を誕生させた。さらに、その『支那学』を媒体とすることで当時の中国学者と活発に学術的交流が行われていた。

敷衍して言えば、胡適の「国故整理」運動に同調した青木は、『水滸伝』所在の探求、章実斎文献の蒐集などに全力を傾けるとともに、金冬心を代表とした近代的芸術、『儒林外史』『紅樓夢』『崔東壁遺書』などに関しても積極的に議論を交わしていた。その一方で、胡適の旺盛な研究意欲に感化され、漢文直読論や岡島冠山の『水滸伝』訳業を論考していた。二人は切磋琢磨から友情の絆を固めただけでなく、学術研究をも前進させていった。その一方で呉虞とのやり取りは儒家倫理観の批判を共同の思想基盤として維持されたが、結局次第に青木への書籍購入の依頼に偏りを見せてしまった。魯迅が新文化運動に対してネガティブな態度と、白樺派同人の小説に対する強い興味を見せていたのに対して、青木は新文化運動への熱い期待を表していたことでズレと隔たりが生じていき、青木と周氏兄弟とのやり取りは長くは続かなかった。

「『支那学』將變成一個打破国境の雑誌、這是我們極歡迎的消息！」（一九二〇年十二月二四日）と胡適が期待していたように、『支那学』は国境を乗

り越えた雑誌になった。そして、その最後を飾る「終刊の辞」に、「本誌は大正期学界の雰囲気内に生れ出で、支那固有も旧文化に沈潜しつつ、而もそれを科学的に解明しようといふ意欲に燃えて創刊されたのであつた。その後幾転機した時代の潮流に棹さしつつ幸に能く波瀾を乗り切つて今日に及んだのであつて、聊か独自の立場から斯学の進歩に貢献し得た事を竊かに光榮とするものである」と書かれていたように、青木と胡適との学術交流は、雑誌『支那学』が「斯学の進歩に貢献」したことに見事な脚注を付けたと言えよう。

注

- 1) 本研究は北京市社会科学基金項目「日本京都学派的中国文学研究」(19WXC008)の助成を受けたものである。
- 2) 青木正児「発刊の辞」(『支那学』第一巻第一号、彙文堂、一九二〇年九月)、一頁。
- 3) 京都帝国大学文学部編『京都帝国大学文学部三十周年史』(内外出版印刷株式会社、一九三五年)、八〇頁。
- 4) 青木・胡適書簡研究班「青木正児・胡適秘蔵往復書簡集」(『名古屋大学中国語学文学論集』、第二十号、二〇〇八年)、二四頁。以下引用された二人のやり取りは全てここからであるので、引用元を略す。
- 5) 青木正児「支那かぶれ」(『青木正児全集』(以下は『全集』と略す)第七巻所収、春秋社、一九七〇年)、四二頁。
- 6) 青木正児「出雲路橋に立つて」、『全集』第七巻所収、五七一頁。
- 7) 青木正児「覚醒せんとする支那文学」、『全集』第二巻所収、二一四頁。
- 8) 青木正児「胡適氏の中国哲学史観き見の事」、『全集』第七巻所収、四九四頁。
- 9) 青木正児「胡適を中心に渦みている文学革命」、『全集』第二巻所収、二一八頁。
- 10) 一九一九年四月二日から五月二七日にかけて、梅蘭芳は日本帝国劇場の招聘により東京、大阪、神戸で公演した。その際、彙文堂の主人大島友直が当時京大支那学の研究者内藤湖南、狩野直喜、鈴木虎雄、濱田耕作など十三人を誘って、大阪での公演を観た。その後、この十三人にそれぞれ梅蘭芳を品評してもらい、『品梅記』の書名で出版した。当時青木は病気のため、実際には舞台を見ていないにもかかわらず、「梅郎と崑曲」という一文を寄せている。

- 11) 青木正児「梅郎と崑曲」、『全集』第二卷所収、一〇九—一〇頁。
- 12) 青木正児「金冬心之芸術」、『全集』第六卷所収、六七頁。
- 13) 青木正児「儒林外史を読む」、『全集』第二卷所収、一七二—一七三頁。
- 14) 青木のこの論文の掲載延期と改題について、陶徳民の論考「近代における「漢文直読」論の由緒と行方——重野安繹・青木正児・倉石武四郎をめぐる思想状況」（同氏『日本における近代中国学の始まり』に所収、関西大学出版部、二〇一七年、八八—一〇〇頁）を参考できる。
- 15) 青木正児「漢文直読論」、『全集』第二卷所収、三四—一頁。
- 16) 青木正児「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」、『全集』第二卷所収、二一九頁。
- 17) 青木正児により執筆された胡適著の『嘗試集』の紹介文、『支那学』第一卷第一号に掲載している。八〇頁。
- 18) 青木正児「水滸伝が日本文学史上に布いている影」、『全集』第二卷所収、二六—六頁。
- 19) その手紙の内容は以下の通りである。我読先生的大著「水滸伝考証」、很佩服。前数年、我師狩野君山直喜先生亦有同一議論、也把元曲的水滸伝説比較小説的『水滸』、他的結論以『水滸』為明初做的。今先生降之明中葉、蓋同工異曲。（君山先生的論載於京都文科大学的雜誌『芸文』、我現在沒有這個雜誌、後來搜得給先生一看吧！）我把先生的高論告訴君山先生、君山先生很高興。所以把那大著借給君山先生看去了、君山先生很推稱先生的頭腦明晰。（一九二〇年十一月二〇日）
- 20) 胡適「水滸伝後考」（『胡適文存一集』所収、黄山書社、一九九六年）、四一—二—四一—三頁。
- 21) 胡適「水滸伝後考」（『胡適文存一集』所収、黄山書社、一九九六年）、四一—二頁。
- 22) 胡適「水滸伝後考」（『胡適文存一集』所収、黄山書社、一九九六年）、三九—八頁。
- 23) これについて、「寄上章氏遺書和水滸百二十回本卷首、摘録、料応你已收到」（一九二一年三月一五日）という胡適宛の手紙から、青木が胡適にこの書き写しを送ったことが分かる。
- 24) これについて、「你的信与百十回的水滸伝校記、都已收到了。今天又接到你惠賜『忠義水滸伝』訳本、我真不知怎樣感謝你好！」（一九二一年五月十九日）という胡適への青木の返信から分かる。
- 25) 名古屋大学附属図書館の「青木文庫」に所蔵される映入眼帘の百五十回本『水滸伝』の表紙には胡適の自筆した「英雄譜二十四冊、中有百十五本的水滸、送給青木迷陽先生、並謝々他送我岡島訓点本忠義水滸伝的原意 胡適 十、三、二」が見られる。
- 26) この青木の論証の主な見方について、以下胡適の青木宛の手紙から分かる。你

考定百十回（英雄譜）本為明末刻本、我覺得大概不錯。可惜鈴木先生所藏本已缺前面的序文与回目了。我懸揣此本之序必与我寄贈你的百十五回本的序相同。此序中有「東望而三經略之魄尚震、西望而兩開府之魂未招」兩句、可証此本初刻成時必在明崇禎時、滿洲已很成辺患、熊廷佑弼袁崇煥已死、流賊已很橫行。你以為如何？訳本『忠義水滸伝』第一四二回有李逵反对招安、宋江大怒欲斬李逵、一大段、為百十五回本所無。此段可以考見「忠義」二字的性質。怪不得聖嘆看不起此本。（一九二一年五月十九日）

- 27) 青木はその論文「水滸伝が日本文学史上に布いてゐる影」では、「鈴木先生は此の書を清初の板だらうと謙遜してられる。僕は明の万暦板位だらうと思つて居る。（中略）色々調べて見ると亦、一種の百二十回本（李氏の百二十回本とは異なる）を節録したものだと推断される。則ち知る此書は李氏の百回本及び百二十回本と相參して『水滸』の源流を考へる重要な資料であることを。この問題は胡適君が將に大いに究めんと志して、若し支那の百回本が見られなかつたら日本へ来て内閣本を見せて貰つても必ず研究を完成する意気込んでゐるから暫く読者と共に刮目して待つていやう。」と訂正している。
- 28) 胡適はその「水滸伝後考」の最後に、「這十個月以来発見的新材料居然証實了我的幾個大胆的假設、這自然是我歡喜的。但我更歡喜的、是我假定的那些結論之中有幾個誤点、現在有了新材料的幫助、居然都得着有價值的糾正。（中略）。如果中国愛讀『水滸』的人都能像青木先生那樣熱心、這個『水滸』問題不日就可以解決了。」と改めて青木に謝意を表している。
- 29) この論文の締め括りとして、「顧みれば『水滸伝』が吾が徳川期の文界を賑はした事は驚く可く、また小説の一体たる「読本」の發達を促進し助成した効は實に感謝す可きものがある。一方には『古今奇觀』の如き短編小説から教へられた都賀庭鐘の『英草紙』の類が發生し、一方には『水滸』から綾足の『本朝水滸伝』が出來て、支那の章回体が伝はり、それが読本發達の因を成しているのである。此の点は『水滸』が吾が文学史上に燦然たる光彩を放つ所以で、特筆大書しなければならぬ功績である。」と青木は結論をつけている。
- 30) この問題については、青木はその論考「岡島冠山と支那白話文学」では、「冠山の支那語は南方の音であつた事は確かだ。室町以来支那との交通の行はれた地方は主として南方の福建杭州辺であつたし、今彼の著書に就て見ても南方音と断定出来る。（中略）。併し何処の音であるか語学上よりの確に其の地を指すことは残念乍ら余の学力が許さぬ。ただ冠山に支那語を教はつたと思はれる太宰春台が伊藤快風の音を時々官音と違ふ所があると非難しているのを見れば、冠山が春台に教へた音が南京官話と云ふ触れ込みであつたらしいと推測される。」と未解決の問題として認

めている。

- 31) 胡適「章實齋年譜自序」(『胡適文存二集』所収、黄山書社、一九九六年)、一三一頁。
- 32) 内藤湖南「胡適之君の新著章實齋年譜を読む」(『内藤湖南全集』第七卷「研幾小録」に収録、筑摩書房、一九七〇年)、六九頁。
- 33) 内藤の蒐集した章氏の著作について、陶徳民の論考「内藤湖南の章實齋顕彰に刺激された中国の学者——胡適・姚名達および張爾田との交流について」(同氏『日本における近代中国学の始まり』に所収、関西大学出版部、二〇一七年、一九五—一九六頁)を参考できる
- 34) 内藤湖南「胡適之君の新著章實齋年譜を読む」(『内藤湖南全集』第七卷「研幾小録」に収録、筑摩書房、一九七〇年)、八一頁。
- 35) 青木正児「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」、『全集』第二卷所収、二四二、二四四頁。
- 36) 魯迅『魯迅全集第十四卷・日記』(人民文学出版社、一九八一年)、一八三頁。
- 37) 張小銅編註『青木正児家藏中国近代名人尺牘』(大象出版社、二〇一一年)、七三—七四頁。
- 38) 魯迅『魯迅全集』第一卷(人民文学出版社、二〇〇五年)、四〇九頁。
- 39) 魯迅博物館蔵『周作人日記』中(大象出版社、一九九六年)、一五八頁。
- 40) 張小銅編註『青木正児家藏中国近代名人尺牘』(大象出版社、二〇一一年)、八一頁。
- 41) 青木正児「呉虞の儒教破壊論」、『全集』第二卷所収、二五二頁。
- 42) 中国革命博物館整理、榮孟源審校『呉虞日記』下冊(四川人民出版社、一九八四年)、一三頁。
- 43) 中国革命博物館整理、榮孟源審校『呉虞日記』下冊(四川人民出版社、一九八四年)、一〇〇頁。
- 44) 一九二一年二月二十日の『呉虞日記』では、「青木先生寄來『支那学』三卷第四号一冊、有本田成之著「法家与儒家之關係」一文。以予与陳独秀、胡適之并称为近年非孔主義之人、而繼之黃梨洲之後、予因取再版『文録』一冊、郵寄本田先生。」とその進呈理由が書かれている。
中国革命博物館整理、榮孟源審校『呉虞日記』下冊(四川人民出版社、一九八四年)、一三頁。九五
- 45) 田苗苗整理『呉虞集・致青木正児(十六通)』(中華書局、二〇一三年)、四二五頁

